[redacted]

21　地域研究と村落調査　　柳澤雅之

『百穀社通信』(ベトナム村落研究会) 1-11, 1994-2001.

本書は桜井由躬雄を中心とする研究グループ，ベトナム村落研究会が組織するベトナム紅河デルタの一村落における学際的村落研究の報告書である．「百穀」とはベトナム語で「Bách Côć バッコック」と書き，本研究が対象とする地域の中心的な三つの集落を包含する旧村落(社)名である．現在の行政区分に従えば，ナムディン省ヴバン県タインロイ社に属するコックタイン合作社の八つの集落の中の3集落を指す．実際にはこの3集落だけではなく，コックタイン合作社全域と，必要に応じて周辺の社でも調査が行われた．しかし本研究は，提唱者である桜井がかつて19世紀の地簿(土地台帳)を研究した地[『ベトナム村落の形成』創文社，1987]で行われ，しかも後述するように村落の歴史研究を重

視することから，現在の名前ではなく旧村名を研究プロジェクト名や調査報告書に冠して使用するようになった．

ベトナムでは1993年に外国人による本格的な現地調査が可能となり，ベトナム村落研究会によって紅河デルタ全域での広域調査が行われた．そして，バッコックが調査地として選定され，1994年から本格的な調査が開始された．調査期間は毎年夏の2〜3週間であるが，不定期に冬季の調査も行われてきた．

これまでバッコック研究に参加したのは，日越両国を中心とする，歴史学・社会学・文化人類学・ジェンダー・考古学・建築学・農学・生態学・地理学・医学など，さまざまな分野の研究者・学生たちである．その意味において本研究はさまざまなディシプリンの研究者が参加する総合的村落研究であるといえる．そして，参加メンバー間で収集した情報の共有とアイデアの交換を目的に『百穀社通信』が当初より編集された．1995年の第1号にはじまり，現在，11号(2001年7月刊)まで刊行されている．

本報告書を東南アジアあるいは東南アジア史研究の「注目の1冊」として取り上げる理由は，1990年代のベトナム研究の急激な深化が背景にある．仏領期以来活発に行われてきたベトナム村落共同体研究は，70年代末のモラル・エコノミー論争に見られるように，抗仏・抗米戦と社会主義化を通じてしばしば世界の注目を浴びたが(学説史は桜井上掲書の序章参照)，80年代までの研究のほとんどは，限られた歴史資料と統計資料，それにPierre Gourouに代表される仏領期の調査報告とに頼るものだった．しかし90年代から史料の大幅な公開と本格的な現地調査とが可能になり，歴史学のみならず，さまざまな分野の研究が急速に蓄積されるようになった．たとえば，村落や村落の変化を対象にしたものとして，human ecologyの観点から村落を描写したLe Trong Cuc & Rambo, A. T., eds., *Too Many People, Too Little Land: The Human Ecology of a Wet Rice-Growing Village in the Red River Delta of Vietnam* (East-West Center, 1993)や，1925年から88年までの文化的・社会的変化に焦点をあてたLuong, H. V., *Revolution in the Village: Tradition and Transformation in North Vietnam, 1925–1988* (University of Hawaii Press, 1992)，第3回Euroviet会議(主に欧米の研究者によるベトナム研究の国際会議)の成果で

ある Kleinen, J., ed., *Vietnamese Society in Transition: The Daily Politics of Reform and Change* (Het Spinhuis, 2001)，あるいは多数のベトナム人研究者が参加した Papin, P. & Tessier, O., eds., *Lang o vung chau tho song hong: Van de con bo ngo* (Trung tam Khoa hoc Xa hoi va Nhan van Quoc gia, 2002) などがある．日本でも末成道男『ベトナムの祖先祭祀――潮曲の社会生活』(風響社，1998)，高田洋子らのメコンデルタ村落調査報告[『メコン通信』1-6号，敬愛大学]のほか，若手の社会学者・人類学者・農学者などによる研究成果が続々と発表されている．

なかでもバッコック研究は，参加者のディシプリンの多様性や調査期間の長期性，農家経済に関する一集落の全戸調査を1995年と2000年に行うといったインタビュー調査の網羅性など，方法論的には他のベトナム村落研究プロジェクトの追随を許さない大規模な総合的村落研究である．したがって本研究の報告書である『百穀社通信』は90年代における最初の総合的ベトナム村落研究の成果の一つであるといってよい．

11号にのぼる『百穀社通信』の内容を見ると，一部にまとまった論考もあるが，基本的には読み物ではなく調査記録と収集資料集であることがわかる．また，項目の内容からは，「歴史地域学」を掲げる桜井のリーダーシップと日本のベトナム研究者の多くが歴史を専門としていることとを反映して，バッコック研究の大きな特色の一つが歴史研究にあることは明白である．

歴史に関する項目としては，考古学的遺物に関する記録，祠堂・位牌関連資料，地簿の分析と聞き取りによる水田所有の歴史的変遷，古老のパーソナルヒストリー，1945年飢饉に関する聞き取り記録，合作社の沿革と幹部の履歴などがある．現在に至る千年単位の歴史を一村落において明らかにしようとする壮大な試みである．

歴史以外の項目では，コックタイン合作社の概要，合作社・生産隊など村内組織の役割，農家経済(1995年と2000年)，税体系関連資料，コックタイン合作社の作付体系および農業技術，ジャガイモ・ビジネス，野菜栽培の実態，地方市場調査，食生活，農村金融，女性労働，祭礼組織，インフラ，教育，医療センター実態調査，1000分の1住居図，ボーリング調査などがある．また，年

間を通じた稲作と野菜作の全農作業記録や投入肥料の量などに関する調査もなされている.

これらの項目の中では農業関連の調査が比較的，詳細に行われている．合作社を中心とした農業生産システムが，村を取り巻く自然や社会・経済条件の変動や不安定さを回避させ，人口稠密で一人あたり農地面積が狭小なデルタ農業の農民レベルでの食糧生産性を確保するだけでなく，さらなる所得の向上や合作社内の福祉の改善や公共事業の促進に積極的な役割を果たしていることが明らかになりつつある.

また，周辺村落に関する調査記録として，紅河デルタおよびナムディン輪中の水利および農業生産，ハノイ周辺の合作社における農外就労，ナムディン省における農村企業に関する記録がある．これらは主に合作社を対象とした調査記録となっており，バッコック(あるいはコックタイン合作社)を相対化するための作業であると位置づけられている.

以上の内容を見ると，これまでの村落研究，たとえば東南アジアでは福井捷朗[『ドンデーン村――東北タイの農業生態』創文社，1988]や坪内良博の研究[『マレー農村の20年』京都大学学術出版会，1996]，ベトナムではヒッキーの南ベトナムでの村落調査[Hickey, G. C., *Village in Vietnam*. Yale University Press, 1964]などに比較して，バッコック研究は村落の長期の歴史解明により労力を割いていることがわかる.

しかし，こうしたバッコック研究の全体像はこれまで不明であった．研究成果の多くが日本語で個別に発表されていたためであり，この点は大きな批判となっていた．そこで，2002年8月にオランダのライデン大学で開催された“Vietnamese Peasants' Activity: An Interaction between Culture and Nature”と題する国際ワークショップにて，まとまった形でバッコックの研究成果がはじめて発表された．ワークショップではバッコック地域を対象として，考古学者による出土陶磁器その他を利用した紀元前から近世までの歴史記述，碑文史料などから見た李朝・陳朝・阮朝期の村落社会の統合・再編過程，古老のパーソナルヒストリーの網羅的インタビューによる近現代史の再構築，合作社を中心とした現在の村落組織の社会的・経済的機能などが報告された．一村

落における形成段階から現在に至るまでの千数百年の歴史が，実証データに基づいてはじめて再構成された．

このワークショップでの成果を一つの区切りとすると，バッコック研究の，歴史研究あるいは地域研究としての今後の課題は以下のようになろう．これはワークショップ時にも議論された．

まず，ディシプリン間の統合が十分であるとは言い難い点があげられる．データの共有利用が『百穀社通信』の目的の一つであるが，十分な機能をまだ果たしているとはいえない．これは地域研究的な手法を用いて学際的な研究を行う場合の積年の課題でもある．

次に，ベトナム歴史研究に対して，一村落における歴史の再構成からいかなる貢献ができるのかが歴史家からは問われよう．たとえば，個々のパーソナルヒストリーの積み重ねによって再構成される民衆の歴史と，いわゆる正統な歴史との違いに，どう折り合いをつけるのか．また，村落の多様性をどう考えればよいのか．なぜなら，仏領期からすでに知られているように，多様なベトナム村落群の中で，一村落を研究することの意味，あるいは一村落の代表性をどう説明するのかが問われるからである．

また，一村落の変遷を歴史的に見た場合，その歴史をどう表現することができるのか．言いかえると，ベトナム村落の歴史に対してどのような理論を提示することができるのかも大きな課題の一つであろう．こうした点が今後のバッコック研究に期待される点でもあり，ベトナムの地域研究や歴史研究の課題でもある．

最後にデータの共有に関して1点．ベトナム研究に限らず，データの共有は通信事情の改善とともに欠かせない動きになりつつある．研究の対象とするのが村落であり，さまざまな側面を持つ以上，さまざまなデータを共有できる形で公開することは，学際的な研究を促進するだけでなく，他の地域との比較を可能にし，多様な村落の理解や，もっと広域の地域間比較にも有効であろう．その意味で『百穀社通信』のように，雑誌によるデータの公開は大きな意味があると考える．しかし，少なくとも英文による online でのデータ検索が将来可能になると，東南アジア研究に関するデータ量は飛躍的に増加するであろう．

全体の知識の底上げこそが，各自の個別テーマにとっても，長い目でみれば研究が飛躍する近道であり，データの共有は将来の大きな課題であるといえる．